

□研究会 Seminar

Understanding War and American Society

講演者：G. Kurt Piehler（テネシー大学准教授）

司会：阿部珠理（立教大学教授、アメリカ研究所所長）

日時：2008年7月11日（金）16:30-19:00

会場：立教大学池袋キャンパス太刀川記念館ホール（3階）

立教大学アメリカ研究所は、テネシー大学准教授で戦争・社会研究センター所長であるG・カート・ピーラー氏を招いて研究会を開催した。ピーラー氏は、南北戦争と第二次世界大戦という2つの戦争がいかにアメリカ社会で記憶されているか、そしてアメリカのナショナル・アイデンティティが形成される際に、それらの記憶が果たした主要な役割について検討した。

まず南北戦争に関しては、この戦争がアメリカ史上もっとも論議を呼んだ戦争であるにも関わらず、他のどの戦争よりも多くの戦争記念碑が建てられたことを紹介した。そして勝利した北部だけでなく、敗北した南部の白人兵士たちも同様に記念碑を建立し、この戦争を記憶したことを強調し、どちらの場合もこれらの記念碑で歴史化しようとしたのは、自軍のために戦った兵卒たちであったことを指摘した。

一方1980年代までほとんど戦争記念碑が建てられなかった第二次世界大戦の歴史化については、ヨーロッパ戦線と太平洋戦争の記憶を比較して論じた。ピーラー氏は第二次世界大戦に従軍した兵士への聞き取り調査の結果から、いかに多くのアメリカ人GIが、ナチと普通のドイツ人兵士の間に明確な区別をしていたかということを示した。また太平洋戦争の歴史化に関しては、その存在価値を示したアメリカ海軍の例を除き、アメリカ社会では忘却されており、文学や映画においても取り扱いが少ないと紹介した。この原因についてピーラー氏は、太平洋戦争が多くの退役軍人が忘れたいと思うような「容赦なき戦争」であり、その選択的な歴史化の背景として、冷戦が重要な役割を果たしていたと論じた。そして結論としてピーラー氏は従軍兵士を記憶し称えることには賛成だが、同時にその国家の参戦理由を忘却させるような戦争の記憶が形成される危険性も自覚しているとして、アメリカ社会における戦争の記憶の複雑性について示唆した。

今回の講演をもとに本誌に寄稿していただいた文章を以下に掲載する。

（文責：奥村理央）